

大自然と戯れるのが好きだ。南太平洋やカリブ海でダイビングをし、キリマンジャロ(5895m)やモンブラン(4810m)の頂に登り、アフリカのサバンナや砂漠、南米の大湿原や氷河、アマゾンや東南アジアの熱帯雨林などで夜を過ごした。神秘的な静寂があれば、野生動物や虫たちの鳴声が交響曲のように響き渡ることもある。満天の星や葉の隙間から漏れる月光を浴びながら眠りに就く。ぜいたくな時間だ。

そんな中で最近悲しくなることがある。海に潜るとポリ袋やペットボトルが手足にまつわりつき、白化し壊滅したサンゴが無残に散らばる。熱帯雨林からはうっそうとした原生林が消え、牛の放牧地や焼け野原が広がる。山に登ると、氷河湖の決壊で流された村の残骸を見ることもある。

地球の歴史約46億年を1年とす

本社客員論説委員

針路 國井 修



くにい・おさむ 1962年、大田原市生まれ。宇都宮高、自治医科大学、ハーバード公衆衛生大学院修了。外務省、長崎大熱帯医学研究所教

授などを経て国連児童基金本部、ミャンマー、ソマリアで保健事業を統括。2022年よりグローバルヘルス技術振興基金CEO。東京都在住。

地球の健康を守る行動を

生命脅かす環境問題

「地球カレンダー」では、人類の誕生は12月31日午後11時37分だが、午後11時59分59秒以降の近代の人類社会と地球環境の変化がすぎましい。

0年以降80倍に増加した国もある。過去50年間で世界の自動車は約6倍、航空旅客数は約30倍に増え、石油・天然ガスの消費量も4倍以上に増えた。

世界で初めて環境破壊に警鐘を鳴らしたのは米国の生物学者レイチェル・カーソンである。1962年の著書「沈黙の春」で殺虫剤

種類は35万種類に達した。うち人間を含む生物に悪影響を与え、環境破壊につながるものは3500種以上に及ぶといわれる。

大気汚染は新型コロナウイルス感染症の年間平均死者数を上回る700万人以上を毎年死に追いやり、地球温暖化で頻発する気象災害による被災者は世界で年間1億

の「異常気象」は通常化している。将来予測の精度が高まる中、今すべきことは分かっているが、現実には地球のことより自分の国、他人のことより自分のことを考えている人が多くかもしれない。特に最近、米国を含む大国の政治や世論にその傾向が強くなり、地球の未来に深刻な影を落としている。

し、その住まい、農業・牧畜のために1分間に東京ドーム2・5個分の森林が失われている。農業生産に使用される化学肥料は1960

DDTを問題視した。その後新たな化学物質が開発・生産され、1950〜2010年の間に化学物質生産量は50倍に増加し、その

人以上だ。筆者も1日で13万人以上の命を奪ったミャンマーのサイクロン、約3千万人が家を失ったバングラデシュの洪水などの支援に関わったが、その凄惨な光景には言葉を失った。

個人の意識変われば

猛暑日や熱波、豪雨や豪雪など

省エネ、節水、交通手段の見直し、食生活、消費行動、緑化活動など、地球の未来のために個人ができることは多い。政治やビジネスは地球の未来を大きく左右するが、政治家や製品、サービスを選ぶのも私たち。個人の意識や行動で流れは変えられる。人間の健康に密接にかかわる地球の健康、プラネタリーヘルスを守るため、自分に何ができるのかを考え、行動を見直すべき時期にきている。